小池辰雄著作集　第４巻『詩篇珠玉集』

第一巻（珠玉的詩篇　二十五篇）

# 【目次】

【詩篇　第１篇】　第１篇　否定道

【詩篇　第２篇】　第２篇　メシヤ預言

【詩篇　第３篇】　第３篇　ダビデとアブサロム

# 【詩篇　第１篇】

１ 恵まれたる哉、この人！　この人は　 　悪の徒のに歩まず、

　 　罪びとのにも立たず、

　 　の座にも坐らず、

２ って、エホバのにこそ、そのがあり、　 　をばう昼もも。

３ そのは木にぞ似る、水のくに植えられて、　 　その到らばその実を結び、

　 　その葉もまたむなき。

　 　かるがゆえそのなすところみな栄えゆく。４ 然かはあらず、かの悪の徒は。

　 　むしろ似る、風の吹き去るに。

５ されば悪の徒はに立ち得ず、

　 　また罪びとは義人の集いに。

６ べ、エホバは義人の道を知り給う。

　　　されど、悪の徒の途は亡びる。

１　「恵まれたる哉」（アシェレー）（アシェレー〔複〕、アシェル〔単〕。）多恵（直訳）。マタイ5･3の「恵まれたる哉（マカリオイ）」と同類の語で、恵みから来る幸であることを忘れてはならない。だから「恵福」とか「恵幸」とか言うべきところ。聖書には、いわゆる「幸福」、ドイツ語で言うと「グリュック」は稀で「ゼーゲン」（祝福、恵福）が圧倒的である。「悪の徒」（レシャーイーム）詩篇、箴言に多い語。レシャ〔単〕、不義、無神の徒、反対概念は「義」（ツェデク）。

　　　「罪びと」（ハッターイーム）ハッター〔単〕、を犯す者で、新約的な罪びとの意ではない。イスラエル人は律法の民だから、この罪は罰に価する。「嘲者」（レーツィーム）レーツ〔単〕、高慢で、不虔で、メフィストーフェレス的な人間、詩篇にはここだけ。

５　「義人」（ツァディーキーム）ツァッディーク〔単〕、律法に即して義しい人（創23･7）その言行において義しい人（ヨブ17･9）。神の嘉し給う実存の人（創6･9、イザヤ3･10）、神は義人（申32･4）。この語は「義」（ツェデク）という語から来ており、「義」は全聖書を貫く最も重要な脊椎骨的な語である。

# 第１篇　否定道

創世記第１章を見ると、天地創造の当初、神は光と闇とを分けた、とある。自然界に光闇の二相が交替するにつれて、生命体は動と静の二相を現ずる。即ち昼間には動き、夜間には眠る。これは自然の秩序である。それなのに人間はいつの間にか、光に善を結びつけ、闇を悪と関連させるに至った。ユダヤの神話によれば、アダム・エバの神への不従順という原罪が、闇を悪に染めたというものである。神人の縦の関係、即ち神意が成るところに義があるのだが、この義が破られた。即ち人間は不義の子となった。これが罪びとの相である。それを闇といい、無明（仏教的表現を用うるならば）という。

１ 恵まれたる哉、この人！　この人は　 　悪の徒のに歩まず、

　 　罪びとのにも立たず、

　 　の座にも坐らず、

この詩篇で「悪の徒」（レシャーイーム）というのは、新約的な言葉でいえば、「不義の徒」である。傍若無神で、平安なき徒輩である。人間界のそのような罪性が自然界にも投影して、大自然にも大なる不調の嘆きが生じた。このことはパウロがロマ書8章で

「我らは知る、すべて造られたるものの今に至るまで共に嘆き、ともに苦しむことを」（ロマ8･22）

と言っている通りである。

ともあれ、自然現象が光闇の交錯の中に生滅してゆく如く、人間生活は善悪の潮流に浮沈している。けれども是れは有るべからざる状態である。人の生活様相には、静動の交代はあろうとも、善悪の混交は有るべきではないからである。性来の人間は、善を欲しても、それは悪に対して決定的にするものではない。悪を否定し、罪と戦わんとすればついにはパウロと共に、善に無力な性来の自己を直視し、

「噫、われなやめる人なる哉、この死の身体より我を救わん者は誰そ」(ロマ7･24）

のなげきに陥り、性来の意志、即ち自由意志の無力をルターと共に告白し、キリストの十字架が、自我、我執をったを全的に信受しなければどうにもならない。「罪のゆるし」とはこのことであり、我執からの解放であり、性来の自由意志の否定である。悪とか罪とかの否定は、実は性来の自己の否定、我執の捕虜となっている自己の否定を、観念的にではなく、具体的に、最も内的な体験としてなすことである。それは、キリストの十字架に於ける自己否定を焦点としなければならないのである。

ところで旧約の世界に於て、イスラエル民族が拠って以て立つべき立場は何処にあったのか。彼らは単なる処世道徳や悟道の如きを、その生活の規準にしていたであろうか、否！ 彼らにとって罪過の第一義は神に対してであり（詩51･4）、思念言動のすべては、神に隠れなきことであった（詩139）。それは彼らの生活を律する規範は、エホバとそのであったからである。神は聖であり、律法は聖く、その一点一画も過ぎゆくべからざるものであった。それ故、これをることは彼らの義務であった。然らばその義務の対象たる中心的善は何であったか。それは律法の根本精神たる、

「心を尽くし、精神を尽くし、力を尽くして、その唯一の神エホバを愛する」

ことであった（申6･4､5、10･12、30･6）。即ち善の主体は、律法に忠実にして、エホバに貞節ならんとする誠心であり、善の客体は、エホバとその律法であった。

２ って、エホバのにこそ、そのがあり、　 　をばう昼もも。

この具体的な善にこそ、イスラエル民族の存在の意義と使命があった。神から律法を授かった彼らには、「昼も夜もこれをう」ことは、ギリシャ人の如く思弁することではなく、くこれを学び、且つ之を行うことに外ならなかった（ヨシュア1･8）。無論、世を経るに従い、律法が儀文に硬化し、繁雑となり、生活が形式に堕した事実は明らかであるが、律法の精神を実践することは、彼らの無上の義務であるのみならず、の歓喜であらねばならなかった。

それならどうして

「エホバの律法にこそ、その歓喜がある」

ことが可能であったか。他なし。彼らは実践道徳の民であるよりは、ろ信仰の族であったからである。エホバにこの民が、ノアのえから、如何に選ばれ、愛せられ、如何に鍛えられ、約束をもって励まされたかをうとき、誰か忠信なるイスラエル人の血に、聖言信従と聖法思慕のなるものがあるをあやしもう。そこでわかるのは、彼らにとって唯一の真理なる聖法（広義に於て）を思慕せしめ、これを実践せんとの意志と歓喜とを与えたものが、歴史的にも、論理的にも、モーセ律法以前の或るものにあったことを。

是れ即ち、エホバがこの民を信ずるその信の力であった。神の力！　神のこの民への信！　これを措いて彼らに、聖法を想い且つ歓んで是れに生きる立場、不信邪悪と戦って拠るべき力はなかったのである。かの預言者的霊的人物が、その歴史の初期──アブラハム──から唱道してやまなかったものは、このエホバの信愛に応うる絶対的信頼であった。預言者（広義）こそは、エホバの律法の本質を体して、超律法の世界をした者である。然り、彼らにはエホバ彼自身の外に聖法はなかったのである。

！　全宇宙をべ、全歴史を貫く聖なる意志であり、発しては「光あれ！」の霊言となり、現われてはかの民族をエジプトよりき出だす行為となった聖法。この聖法の成るがままに、と念じ、これにその身縛せられて動く者は恵福である。彼こそは最も自由なる人である。聖法は光よりも輝かしく、闇よりも隠れたる道である。聖法一切か、人智本位か！　択るべき途はいずれか一つのみ。人生到るところに岐路がある。しかも人生に岐路は唯だ一つのみ。「悪の徒のを斥け、「罪びとの途を拒み、「の座を否むは、聖法に生きる者のみのて為し得る積極的否定である。

義の法則と愛の摂理のなす聖法に対して、絶対の信頼をおく天から賜った第二の意志（新しき我）は、この人智中心の社会、虚栄虚偽の、功利打算の生活、不虔不義の現世において、道はただ否定に在りと断ずる。て如何なる真の行為が、この世への「否」を以て始まらなかったか。神の意志に捉えられた彼らは、否定道をひきされた。ノア、アブラハム、モーセ、エリヤ、イザヤ、エレミヤ、パウロ、アタナシウス、アウグスティヌス、フランシス、ダンテ、ザヴィエル、ルター、ウェスレー、わが内村、藤井、等々、その存在は秋の夜に闇を否定するの光！　真理は否定に在る。いつか審判の大いなる日が来て、最後に悪が闇から絶滅し、神の意志と理念が全く成就する期まで、この道は続かざるを得ない。

人生の旅の始めに、はや枕する処のなかった人の子は、十二の少年にしてすでに父母の家路を拒まざるを得なかった。また三十路を越ゆる頃、曠野と飢餓の中でただ独り、不信の大敵を三度び否み退けた。遂には弟子の何びとも従い得なかった否定道をりつめ、何処に到りついたのか。ゴルゴタに！　しかも彼自身、「わが意志」を「汝の意志」を以て否定し、「汝の」の大肯定なる十字架の上に身をした。実にキリストの十字架道に優る否定道が何処にあるか。

「わが神、わが神、汝ぞ我を棄て給いし」（詩22･1、マタイ27･46）

の絶叫にこもる神義の叫びは、

「父よ、彼らを赦し給え、その為すところを知らざればなり」（ルカ23･34）

の贖罪愛への転入となる。

しからば、キリスト・イエスの徹底的自己否定道によって成就した義の道は如何にして可能であったか。彼の中に聖霊が充満し、聖意をんで肯定して、我意を否定する力があったからである。我意のみではない、サタンの霊に打ち勝ち、凡そ神にそむく一切の事態を否定し、相手が大祭司であろうと、パリサイ、サドカイの徒輩であろうと、ローマの官憲であろうと、否定を貫き、天下無敵の勇者で彼はあった。彼にとって愛は敵を否定しながら、これをって救うことであった。これが聖霊がもっている愛である。贖罪愛である。

自己なき、無私の無的実存の、この否定道は「エホバの僕」の道で、ィザヤ書第53章がキリストのこの道を預言していた。

それゆえに、我々がこの否定道を行ぜんとならば、ロマ書７章のパウロの悲痛の叫びたる「この死の」我執の捕虜たる存在を、十字架という贖罪門を通って、聖霊のキリストの中へと投身するのほかに道はない。パウロが

「我れキリストと共に十字架せられたり、我れ生く、されど我に非ず、キリストわがに生き給うなり」（ガラテヤ2･20）

といった、その「キリストわが中に」とはキリストの聖霊がわが中にということの他何ものでもない。十字架の大否定道を賜ってこそ、聖霊の大肯定道を往くことになる。

３ そのは木にぞ似る、水のくに植えられて、　 　その到らばその実を結び、

　 　その葉もまたむなき。

　 　かるがゆえそのなすところみな栄えゆく。

そのときはじめて、その存在は「水のくに値えられた」木のように、枝葉が伸び、花が咲き、実が結ぶのである。これはキリストと神の栄光のあらわれであって、生涯が讃美となる。

# 【詩篇　第２篇】

１ 何ゆえに諸民は立ちさわぎ、

　 　諸国はしきことをるのか。

２ 地の諸王は立ち構え、

　 　はもろともにう。

　 　エホバにき、そのに逆って。

３ 「我らいざ彼らのをうち砕き、

　 　我らより彼らの縄目を棄て去ろう！」

４ 天に坐し給う者うち笑い、

　 　主は彼らを嘲り給う。

５ かくて彼はのあまり彼らにを発し

　　　憤激をもて彼らをわしめ給う。６ 「されど我は立てたるぞわが王を　 　わが聖山シオンの上に！」

７ 私はエホバのをべよう、

　 　彼は私にうた、「汝はわが子、

　 　我は今日こそ汝を生んだ！

８ 我に求めよ、さらば我は与える、

　 　がとして諸々の国を、

　 　汝がとして地のまでを。

９ 汝はの杖で彼らをうち破り、　 　のの如く彼らを砕く。」

10 さればいざ諸王よくあれ、　 　警告をうけよ地のら。11 をもってエホバに仕え、

　 　をもって歓び、12 子にせよ！

　 　彼怒って汝らが途に亡びないために

　 　その怒はたちどころに燃え立つから。

　 　なる哉、彼に信頼するすべての者は！

　　本篇は「メシヤ詩篇」として20、45、61、72、89、110、113等を参照。特に89を。

１　「虚しきこと」（リーク）この一語にルターは全詩の鍵を見た。宗教的な「虚しきこと」は偶像崇拝である。創6･5、詩14･1～3等と合わせ思えば、世俗的なねたみ、あらそいのすがたがわかる。

　　　第一行、第四行は完了形、第二、第三行は未完了形、動的事件の躍如たる表現。訳文としてはむしろ現在的な表現とした。

２　「受膏者（メシヤ）」（マーシーアﾊ）、ギリシャ語ではクリストス。

　　神政に与る王（サウル、サ前8･7、ダビデ、サ前16･13、サ後19･21、ソロモン代下6･42の如き）、祭司（出30･22～33、レビ8･10～12、詩133･2）、族長（詩105･15）、預言者（詩61･1～3、但し預言者の場合は内的霊的次元が高い）等がその職またはその使命を負うとき、首に聖灌膏をそそがれたことに由る。聖別され、神霊の降下を蒙った者。詩篇において王たるメシヤに関連する例は、2･2、18･50、20･6、28･8、84･9、89･38､51、132･10､17等。キリスト・イエスヘの預言と思われる信仰的判断においてメシヤ預言ということになる。

４　「うち笑い」（イスハーク）詩37･13、59･8参照。アブラハムもサラも老年で子が生れることを笑った。そこで生まれた子に神から「イスハーク」（イサク）と命名すべく命ぜられた（創17、18）。

６　ＬＸＸ（七十人訳ギリシャ語旧約聖書）によると「されど私は彼によって置かれた、彼の聖山シオンの上に」。（Gk,Dh,Btはこれに拠り、Kl,KgはＭ原典を支持する。訳者はＭに従った。）

12　「子に接吻せよ！」（ナッシェクー・バル）「子」という語がアラミ語の「バル」で、ヘブライ語の「ベン」でないので、この警告に対外的要素もうかがえる。「接吻せよ！」は強い表現が用いられている、「あつく、ながく、接吻せよ！」といった語調。

# 第２篇　メシヤ預言

詩篇第一が、個人の実存の根本問題、人生行路における実践問題とそれに由る福祉を説くものであるならば、第二篇は、個人の有機的団体としての国家の在るべき態度、国家存立の原理及びそれに関わる歴史の課題を示すものと言い得よう。前者が実存の基本的真理の故に全篇の序詩に据えられたとするならば、後者はその時代的背景が必然的契機となって詩篇第一巻（1～41）の序篇たるの位置を占めたものと思われる。我々は今この詩の本義の把握を試みたい。

１ 何ゆえに諸民は立ちさわぎ、

　 　諸国はしきことをるのか。

２ 地の諸王は立ち構え、

　 　はもろともにう。

　 　エホバにき、そのに逆って。

３ 「我らいざ彼らのをうち砕き、

　 　我らより彼らの縄目を棄て去ろう！」

「何ゆえに」と詩人は異常な憤激をもってまず問題を提起した。それがいかほど現実にはられない警告であるにせよ、現実の諸国の不穏な状態とその原因を明察する詩人にとっては、黙すに堪え難い発言であった。問題の提起者たる彼は、その解決の原理をしかと把握している。しかしそれが実現の至難をも彼はひそかに洞察していたであろう。にも拘らず、偉大な確信は理想を遠き彼方にのみは見ない。理想は遠くしてつ近い。しかし彼の理想の解釈の側には避けがたい錯誤があった。

詩人の魂は何処に腰を据えてものを言っているのか。彼は、りて清火天に昇り、この真白きの王国を訪ねたダンテの如く、神の近きあたりにり、そこから此処のをしていたと言い得よう。誰か混沌の世の一隅に居て、此の暗影をにおさめ得ようか。真に罪の何たるかを知る者は、罪をわれて義とされた者である。真に世の汚濁を観るものは、その心この世には死んだ者の眼である。その如くこの力ある詩人の眼は神の光に浸透されていた。地のもろもろの主権者、代表者の相議し相論ずるところ、さまざまの民族、国人のざわめき求め、いらだちるところ、その究極の目的は何か。神への反抗である。聖なるのである。彼らはそれがも跳躍を試みて地球を蹴得たと思うほどの愚挙であり、一石を投じて大海に波瀾を起こし得たと信ずる程にもの狂おしいことであるのを知らない。彼らはまた何をもってそのとしているのか。

４ 天に坐し給う者うち笑い、

　 　主は彼らを嘲り給う。

５ かくて彼はのあまり彼らにを発し

　　　憤激をもて彼らをわしめ給う。６ 「されど我は立てたるぞわが王を　 　わが聖山シオンの上に！」

天からこれを臨めば、彼らは風をい、また泡を呑む者の如く、にりまた水をつかもうとするに似ていないか。凡そ此くの如きは天に坐する者をして破顔一笑を禁じ得ざらしめる。もう一人の実在者からも嘲笑のとならざるを得ない。さて聖なる神が笑いるというが如き表現は詩的妄想の所産であるか、詩人のであるか。それとも所謂「心理的擬人観」のを招くものであろうか。科学的実在性と文化的実感性においてのみ意味と価値とを見出そうとする「余りにも人間的な」近代人には、旧約の世界における生き生きとした実体験、霊的実在者に直面する厳かな事実を知るもなかろう。「神の嘲笑」という皮肉な表現の奥にひそむ深いを想う。

７ 私はエホバのをべよう、

　 　彼は私にうた、「汝はわが子、

　 　我は今日こそ汝を生んだ！

８ 我に求めよ、さらば我は与える、

　 　がとして諸々の国を、

　 　汝がとして地のまでを。

９ 汝はの杖で彼らをうち破り、　 　のの如く彼らを砕く。」

神の笑いはまたりに転ずる。神の愛がときに怒として現われるように。彼の聖憤はに発し、その聖言はに現われた。それは何処に実現したのであるか。彼の「聖山シオンの上に！」そしてそれは何時であるか。「今日！」である。そしてそれは何ぴとにであるか。「エホバのに」。即ち神政の王者に、しかも詩人その人に！　今日こそ彼は立たしめられて、神と父子の関係に入った。神の選びと宣言に由らなければ知り得ない自覚であり、与えられなければち得ぬ特権である。彼は世界の統治者たるの大任を負わしめられたと信じた。野心が彼を立たせたのではなく、神の要求が彼をえたのである。そこにこそまことの責任と義務とがある。王権は神への信従においてのみ全うされねばならない。

しかし彼が現実に世界を統治すべく神から委ねられたかどうか。国運隆々たるソロモンの自負か、或は独立に意気揚々たるマカビウス時代の過信か。そして現世のメシヤに対する期待は、ダビデをその預言的存在として仰ぐとも、イスラエル民族の自負による宿命的ではないか。現世の王は断じて神の位置に立つことをゆるされない。世界の統治はただ神のみのにして犯すべからざるものである。さもあらばあれ、祝福されたこの誤信よ！　この誤信に偉大な歴史的課題が秘められていた。エホバがてある夜ナタンに告げ給うた言（サムエル後書7･5～16）は、かの王者ダビデにおいて目覚ましき応答を得たとは言え、果してそのための預言であったかは知るもない。またこの王者の偉大な自覚は、現実には幻滅と悲劇に終らざるを得ないものであったにせよ、そのの奥に潜在する真理そのものは、やがて歴史の上に驚くべき啓示の事実として生まれ出づべき預言であったのである。特に

「我はかれの父となり、彼はわが子となるべし」（サムエル後書7･14）

との一言は不思議なとなった。神は機に臨んで、そのとき最も適切な言を与え給う。そこに預言の本質がある。その実現が遠き未来であるか、近き将来に於てであるか。それは神の側の秘義で「父のみぞ知り給う」ところである。そういう不可知的なものでありながら、つねに迫りをもった質的なものであるところに終末的という意義がある。預言というものは、大洋をそれとなくするの如きものである。は風波潮流になやまされ、雲霧暗夜に進路を失わんとして、始めてその島のそこになくてならぬ意味をし、いつか図らずも岸高き不滅の国に着いて見れば、かの島々こそいつしか舟人を目的の王国へ導いて居たものであるということを知るのである。預言の島は寂しい。その島の言は世の言と調子がちがう。その島のたる預言者すらも、究極の意味を知らない。神の言であるからである。あるとき特別の意味で、「汝はわが子」という声を聴いた人があった。彼はその後、人にはけられ、神にすら棄てられたが。

「我は今日こそ汝を生んだ」

という事実は、その人に永遠の真理となった。何となれば彼は全く逆説的に、地上では「神の僕」として聖意を体現し、天界では霊の王者、メシヤとして、霊界から霊油たる聖霊をそそぎ、万人救済の本願をもって、世の終末まで、「地の極まで」救のわざを進めて在り給う。

10 さればいざ諸王よくあれ、　 　警告をうけよ地のら。11 をもってエホバに仕え、

　 　をもって歓び、12 子にせよ！

　 　彼怒って汝らが途に亡びないために

　 　その怒はたちどころに燃え立つから。

　 　なる哉、彼に信頼するすべての者は！

この詩篇には「子に接吻せよという大胆な表現がある。しかもそれは「をもって「をもってという前提のもとである。即ち平伏しの魂、砕けの心をもってメシヤに信頼、、投身せよとの意である。メシヤは抱きって下さる。聖霊の力が臨む。聖霊はそのような白熱の愛の霊である。イザヤもエレミヤもホセアもミカもヨエルもマラキも預言者は皆のと使命においてメシヤの霊にあずかり、キリストを知らずして預言していたのである。

「なる哉、彼に信頼するすべての者は！」

これを新約の光でよむとき、

「恵まれたる哉、彼キリストに托身し、聖霊を受けてキリストの力にかるすべての者は！」

ということになる。「信頼」とは主観的に、依り頼むといったくらいのことではない。自分の信仰も実存もあてにならない。あてになるのはメシヤ、キリストだけである。だから、あるがままの自分をキリストの中に投身して一如となる、そういう現実である。それがである。そこに預言の目的がある。

# 【詩篇　第３篇】

　(1)　ダビデの絃歌 　その子アブサロムかられたときの。

１(2)　ああよ、何と増し加わるかわが敵は！　　 　　何と多きやにち向かう者は。

２(3)　何と多きやわが魂に向かって言う者、　　 　「救は彼に神からありはしない」と。 セラ３(4)　だがあなたこそは、エホバよ、私を囲む。

 　　わが、わがをげ給う ！４(5)　大声で、エホバに私はいつも呼ばわった。　　 　　そのとき彼は応え給うた、その聖山から。 セラ

５(6)　私は、寝た。眠った。目さめた。　　 　　エホバが私を支え給うからだ。

６(7)　私は怖れない。の民が

 　　私をとり囲んで立ち構えようとも。

７(8)　ち給え、エホバよ！　救い給え、神よ！

 　　あなたはわがすべての敵のを撃ち、 　　悪い奴らの歯を砕き給うた。

８(9)　エホバにこそはある。

 　　が民にが祝福のあらんことを！ セラ

１　「よ」。エホバは周知の如く、本来「ヤハウェー」という神の名。ヤハウェーは「ハーヤー」という動詞から来る。これは「生起する」「存在する」「実存する」意。だから、動的な「実存者」の意となる。その「ヤハウェー」という聖名を経典をよむとき「アドナイ」とんだ。これは「わが主」の意。ヤハウェーの子音と、アドナイの母音を交ぜて訓んだら、「イェホーヴァー」となった。そういう誤読がわかったのが前世紀のことである。学問的には「ヤハウェー」であるが、私は歴史的な訓み方「エホバ」に従う。というのは、「実存者にしてわが主」という意味が、この「エホバ」という訓み方にふくまれて、却って、内実があると思うからである。「エホバ」は即ち、「実存主」ということになる。

２　「セラ」節後付記のこのしるしは、一般に絃歌にあるので、次節から絃音か声音を「高める」か新たな伴奏を「起こす」符号と思われる。

４　「人声で」（コーリー）「わが声」という謂わば投げ出したような表現。

○　さてこの第３篇に「その聖山から」とか、第８節の如き句があるので、ダビデの言葉とはうけとれない、と大方の学者が判断するが、アブサロムの叛逆に遭ったときは既にエルサレムは都となっていたから、聖山シオンを中心に考えてさしつかえないわけである。終句の祭司的な祈りも、何も祭司に限らず、王者の祈りとして不可ではない。

　　　私はこの絃歌第３篇は、次の第４篇と共にダビデの姉妹篇として、「晨の祈り」「夕の折り」の伝統に従いたいと思う。

# 第３篇　ダビデとアブサロム

── ダビデの晨の祈り ──

妹タマルのために兄弟アムノンを殺害してから、ゲシュルに隠れること三年、エルサレムに居ること二歳。しかも父ダビデの目を避けていたアブサロムにはすでに或る野心がしていた。ダビデに一抹の憂色なきを得なかった。才気無双のアブサロムはまことにより出でて藍よりき王子であった（サ後14･25）。更に流れた四年は彼に何をしたか。人心は彼に服し、父王の議官アヒトペルは既にの中にあった。彼は期を謀ってダビデをり、その間をくイスラエルの支派にわし、事の次第を露知らぬ二百の者をひき具してヘブロンを指して進む。子を信じて神にうる者となし、「に往け」と祝したのはダビデであった。ときならぬの響きはヘブロンの空に戦雲を呼び起こしたのである。エホバは天に在ます！　けれども王座は地に揺ぎ、乱臣のため、無比の勇者ダビデも今は、「てよ、我ら逃げん」という悲痛の一言と共に都を落ちゆく敗者となった。

　　　ダビデの絃歌 　その子アブサロムかられたときの。

１　ああよ、何と増し加わるかわが敵は！　　　何と多きやにち向かう者は。

２　何と多きやわが魂に向かって言う者、　　 「救は彼に神からありはしない」と。

いかなる宿命のれか。アブサロムとは「父は平安なり」とのなるに、愛のは叛逆を以て断たれつつある。しかのみならず、見よ、とう敵勢を！　また「救は彼に神からありはしない」とは聞き知らぬ者らのではない。かつて一度び大きな罪を犯したとはいえ、彼の心はすでに平伏し、砕かれて今あるはただ信頼の一途。エホバは彼のまた栄光である。そうではあるが反逆の民の嘲笑は皮肉にも古き罪業の跡と現実のの身をむのである。けれどもこの時こそ彼はと知ったのである。おのが立場も存在も、その原因も目的も方法も、すべてが唯だエホバであることを！　その牧場から呼び出し給うたあの夢のような少年時代から、多彩の生涯を今まで導き給うたのは唯だ彼の深き意志と愛であったことを。

３　だがあなたこそは、エホバよ、私を囲む。

 　わが、わがをげ給う ！４　大声で、エホバに私はいつも呼ばわった。　　 　そのとき彼は応え給うた、その聖山から。

５　私は、寝た。眠った。目さめた。　　　エホバが私を支え給うからだ。

「だが汝こそは、エホバよ、私を囲む。……」とは魂のどん底からの叫びであった。讃美の底には平安がある。「私は、寝た。眠った。目さめた」。敵前のこの事実、信頼の勝利はこの一句に尽きる。全身を神のみふところに全托の眠り。知らぬ間に霊気をたましいが吸っている。

６　私は怖れない。の民が

 　私をとり囲んで立ち構えようとも。

７　ち給え、エホバよ！　救い給え、神よ！

 　あなたはわがすべての敵のを撃ち、 　悪い奴らの歯を砕き給うた。

８　エホバにこそはある。

 　が民にが祝福のあらんことを！

それで力が湧き立つ。千万の民がくとも、何かあろう。後年カーツームの空しく、その義血をいだ無剣の将軍ゴルドンに枕を高うせしめたのは此の如き一句ではなかったろうか。信実は信実を呼ぶ。放浪の王にも忠臣が現われた。それはいったい誰だ！　異邦の市ガテのイツタイがその人であった。

「誠に王わが主いかなる処にますとも、生死ともに僕もまた其処に居るべし」（サ後15・21）

と。

「海ゆかば水つく、山ゆかば草むす屍、大君のにこそ死なめ、みはせじ」

東西志士の言相応えてゆかしき限りである。子にかれて却って見知らぬ者に信頼されたのである。うに、イスラエルは神に逆って異邦人が却って神を仰いだのである。受難者ダビデの心痛に、我らは神のを思う。ダビデの祈祷は徒らにその懐に還らずしてアヒトペルのは神これを愚かならしめ給うた（サ後17･14）。けれどもダビデは飽くまでも己れを迫むる子を撃とうとはしなかった。サウルののシメイが大に、「汝血を流す人よ……」と非道なるを浴びせた時も、彼は怒り立つ臣等をめて、

「視よ、わが身より出でたるわが子わが生命を求む、況んやこのベニヤミン人をや。彼をしてわしめよ。エホバ彼に命じ給えるなり」

とした。驚くべき大度、赦免の心！　にヨアブがダビデの禁令を無視してアブサロムを槍にかけたのを知ったときの彼の切々たる悲嘆は！

「わが子アブサロムよ、わが子、わが子アブサロムよ！

嗚呼われ汝に代りて死にたらんものを！　アブサロムわが子よ、わが子よ！」

と。さきにはサウルのな追迫に報ゆるにあの忠節と信頼を以てしたダビデ。彼れと此れとを想い合わせるとき、ヨアブの言が図らずも偉大な真理を表明したことを知る。

「汝はおのれをむ者を愛し、おのれを愛する者を悪むなり……」（サ後19･6～7）

まことに愛しせたのである。然り、彼は叛逆の子のためにおのが生命を棄てんと欲した。

「ああエルサレム、エルサレム、預言者たちを殺し、わされたる人々を石にて撃つ者よ、……」

人の子は誰の為にその生命を！

ギデロンの川を涙ながらに渡った者の野のほとりの祈りは永くの星が黙示する。

「エホバにこそ救いはある」

と。

「ゆかしき神のおもいに

　けゆくわが心は

　露けき朝の息吹きに

　いきづく野べの花か」

　　　　　　　　　　（讃美歌30番）